

原因だと考えられる。12歳以上の十分に成熟した順位の高い雄は未成年や成体雌を頻りに支援した。しかし、霊長類研究所生化学部門が行ったDNA fingerprinting方による父子判定の結果と対応させた時、霊長類研究所の2つの放飼集団ともに、成体雄が自身の子や自身の子をもつ成体雌を選択的に支援していると証拠は得られなかった。成体雄による未成年や成体雌への支援は、可能性のある子とその母親への支援と考えることによって説明できるかもしれない。放飼集団の高齢雄は長い繁殖活動の結果、多くの子どもを幅広い年齢層で持っている。そうして彼が自身の子を識別できないとしたら、集団内のほとんどの個体は自身の子かその母親である可能性が等しくある。ただし、雌は自身の子の可能性だけでなく自身の子を育てている可能性もあるので、雄よりは好ましい存在である。さらに、雄は繁殖の競争相手になり得るという点からも好ましい存在ではない。すなわち、高齢の雄にとっては雌は等しく価値のある存在である。それゆえ彼等は、順位による雌や未成年間の不平等を是正するように振舞うのではないだろうか。

課題 5

計画：5-1

霊長類の認知機能：ニホンザルとハトにおける概念形成の比較研究

実森正子（千葉大）

野外観察の結果から、サルが個体弁別を行っていたり、個体間の関係を理解していることが多数報告されている。しかし、実験室場面での認知的側面からの分析を行った例は少ない。本研究では、カテゴリ弁別という観点から、写真刺激による個体弁別について検討した。象徴的見本合わせ課題で写真刺激の弁別訓練を行った後、同一個体の他の写真刺激への般化を見ることによって、それらの写真が同一個体のものとしてカテゴリー化されているか否かを検討した。尚、この結果は、同様の方法を用いてハトを被験体として得られた結果と比較検討される。

〈被験体〉アカゲザル2頭、ニホンザル1頭。年齢は3～10歳。〈刺激〉被験体が会ったことのない

アカゲザル2頭の写真。〈方法〉タッチパネル上に見本刺激として個体Aが呈示されたときには緑色、個体Bが呈示されたときには赤色を選択するという象徴的見本合わせ課題で訓練を行った。訓練刺激には、各個体1枚ずつ、計2枚の写真を用い、1日1セッション100試行を行った。学習基準（各刺激につき80%以上の正反応率）に達した後、同じ個体の別の写真を用いて、プローブテストを行った。プローブテストでは顔の向きや視線の異なる写真を各個体につき4枚ずつ用いた。

〈結果〉アカゲザル1頭のみが7200試行で学習完成基準に達した。プローブテストではテスト刺激8枚中1枚のみで明らかな般化が見られたが、他の刺激では弁別はほぼチャンスレベルであった。このことは1枚のスライド写真のみを用いた訓練では、同一個体の写真刺激のカテゴリ化が行われなかったことを示している。また、テスト刺激の呈示中に観察された被験体の反応及び反応潜時を分析したところ、威嚇の表情をした写真では有意に反応潜時が長く、驚愕反応及び攻撃反応が特異的にみられた。従って、弁別の般化が生じなかったのは、トレーニングに各1枚の写真刺激しか用いなかったため、用いた訓練刺激に特有の何らかの特性が手がかりになっていたためと考えられる。

計画：5-2

ヒトとチンパンジーの手話コミュニケーションにおける模倣と表象

市田泰弘（国立身障者リハビリテーションセンター）・大杉 豊（ロチェスター大・言語）

ヒトの手話の専門家の立場から、チンパンジーとの手話によるコミュニケーションの可能性を検討した。手をとって手話を教えたり、ただ真似ればよいといった訓練を行わず、自然なつきあいの中での模倣や表象の発生について調べた。

〈方法〉手話に堪能な二人の研究者が直接チンパンジーと接触する「遊び」の場面において、(1)自然な遊びの中でチンパンジーが自発する模倣や、(2)共同作業課題の導入によって形成される表象について検討した。被験体はパン♀（実験開始時の年齢6歳0カ月）。1989年12月より週1回約1時間半ずつ手話による語りかけをして遊んだ。

〈結果と考察〉(1)の自然な遊び場面では、食物の報酬を用いずに、①身体や②物を使った遊びを